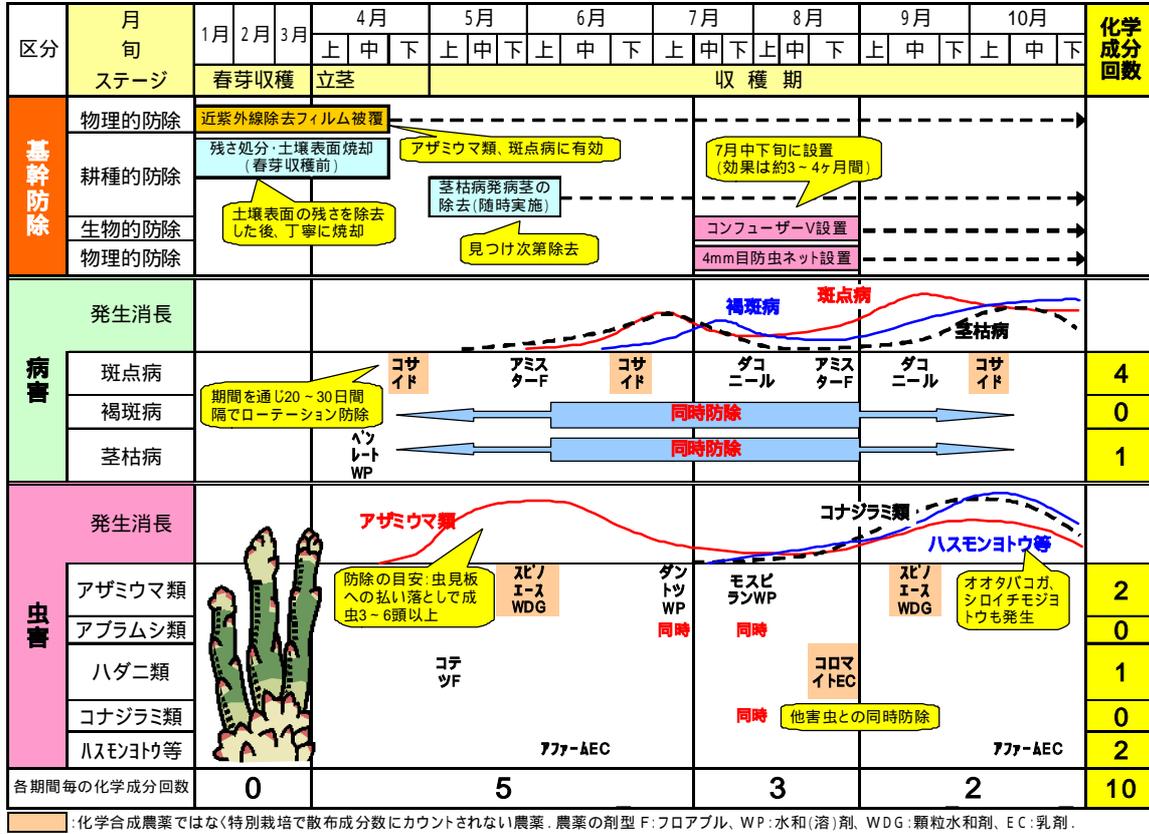


・半促成長期どり栽培アスパラガス

1. 特別栽培に対応する総合防除体系

佐賀県特別栽培農産物認証制度に対応した半促成長期どりアスパラガスの総合防除体系(例)



2. 総合防除体系の時期別のポイント

1) 12月(前作収穫終了後)~3月(春芽収穫期)(目標成分0回)

この期間における病害虫の発生は少ないが、斑点病、褐斑病、茎枯病等の伝染源となる残渣の処分を徹底し、4月以降に向けた準備を行う。

- (1) 前作において斑点病、褐斑病、茎枯病が発生した圃場では、株の刈り取り処分時に、茎をできるだけ地際部から切断し、圃場外に持ち出し処分する。
- (2) 地表面に落下した罹病葉や茎の残骸は、次年度の伝染源になるため、できるだけ集めて処分し、残存したものはバーナーで丁寧に焼却する。
- (3) バーナーによる焼却は、株元に生息するハダニ類の防除にも有効である。
- (4) 春先以降のアザミウマ類および斑点病対策として、近紫外線除去(波長 380nm 以下の光を除去)フィルム(以下、UVA フィルム)を展張する。

2) 立茎時(4月)~梅雨期(7月)(目標成分5回以下)

注意する病害虫: 斑点病、褐斑病、茎枯病、アザミウマ類

斑点病、褐斑病、茎枯病の初発時期であり、この時期の防除は秋季以降の発生を抑制し、防除回数を低減する上で重要である。また、5~7月は圃場外からのアザミウマ類の飛び込みが急増し、若茎に被害を生じるため、虫見板(約 20 x 30cm)への払い落

としにより寄生頭数を調査し、成虫が3~6頭/(カ所)以上認められる場合は薬剤を散布(スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤等)する。

- (1) 斑点病、褐斑病、茎枯病に対し、立茎後から殺菌剤を20~30日間隔でローテーション散布(コサイド DF アミスター20 フロアブル コサイド DF)する。なお、多発生が予想される場合は散布間隔を短縮し、カウントされないコサイド DFの追加防除を行う。
- (2) 斑点病、褐斑病は多湿条件で発生しやすい。そのため同一圃場内においても、出入口付近では少なく中央部で多い傾向にある。発病した茎葉は伝染源となるため、見つけ次第除去する。
- (3) 茎枯病は降雨が降り込みやすいハウスサイド部の比較的新しい茎に発生しやすい。病斑部には黒色の柄子殻が多量に形成され、内部に形成される分生子が降雨によって周辺に飛散して伝染するため、発病茎は見つけ次第除去する。
- (4) UVA フィルムを被覆した圃場では、農 P0 系フィルムに比べ、アザミウマ類の飛び込み量が少ない。また、斑点病の発生も農 P0 系フィルムに比べ抑制される。

3) 7月(梅雨明け)~8月(目標成分3回以下)

注意する病害虫: 斑点病、褐斑病、茎枯病、アザミウマ類

盛夏期は各病害虫の発生が停滞傾向になるが、梅雨期に病害が発生した圃場では、秋季の発生を防ぐため、被害茎葉を除去することが重要である。また、コンフューザーV(複合交信攪乱フェロモン剤)や防虫ネットはヨトウ類発生前の7月中下旬に設置する。

- (1) 斑点病、褐斑病、茎枯病に対しては、20~30日間隔での殺菌剤のローテーション散布(ダコニール 1000 アミスター20 フロアブル)を継続する。なお、コサイド DFを高温時に使用すると、擬葉の黄化等を生じる場合があるため、高温期の使用は避ける。
- (2) ヨトウ類(ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ、ヨトウムシ)に対するコンフューザーVの設置は、7月中下旬を目安に行う。交信攪乱効果はその後3~4ヶ月持続する。
- (3) アザミウマ類成虫が虫見板への払い落としにより3~6頭/(カ所)以上認められる場合は、モスピラン水溶剤を散布する。本剤はアブラムシ類、コナジラミ類の同時防除が可能である。

4) 9~11月(収穫終了時)(目標成分2回以下)

注意する病害虫: 斑点病、褐斑病、茎枯病、アザミウマ類、ヨトウ類、コナジラミ類

梅雨期に病害が発生した圃場では、秋雨の時期から急激に進展し、早期落葉、株枯れを生じる場合がある。そのため、斑点病、褐斑病、茎枯病が少発生の場合でも、薬剤防除は10月まで継続する。また、9月以降、ヨトウ類、コナジラミ類の発生が増加するため注意する。

- (1) 斑点病、褐斑病、茎枯病の発生進展期に当たるため、殺菌剤（ダコニール 1000、コサイド DF）の散布間隔を 20 日程度に短縮する。なお、発生が増加する場合はコサイド DF の追加防除を行う。
- (2) UVA フィルム被覆圃場では、農 P0 系フィルム被覆圃場に比べ、コナジラミ類の発生が増加しやすいので注意する。本県のアスパラガスでは、バイオタイプ B と Q の両方が発生する。